

「くま(＝陰)」が無い

歌舞伎役者の化粧のこを隈取りと呼ぶが、「くま」とは光に対する陰の部分を指す言葉である。その「くま」が「無い」ということは、「一点の曇りや陰りもなく光が満ちている状態」ということ。「くまなき月影(＝曇りや陰がない明るく月の光)」という形でよく用いる。

くまなし

形ク

花はさかりに、月はくまなきをのみ、見るものは。(徒然)
花の花は満開を 月は曇りや陰がないだけを 見るものだけか じゃ、ネーではな。

280

くまなし

(事シ)

形シク

仰々しい・おおげさだ

類 324

〇〇もの

大きく目立って印象的な感じ

「事」を二つ重ねて形容詞化した語で、ものものしくおおげさな様子を表す。「このこと」とも言い、「おおおおおろし」(→324)もほぼ同じ意味。類似の意味の語「ものもの」が好感のもてる場合に用いられるのに対し、「くまなし」は、非難に値する悪い場合に用いられる。

何事にかあらむ、くまなしのしりて。(徒然)
何事かあらむか おおげさな 大言で言う態度

281

しげし

(茂・繁)

形ク

①(草木が)茂っている
 ②(数量や頻度が)多い・度重なる

① 木々の木の葉、まだいとしげうはあらで。(枕)
木々の木の葉は まだそれほど茂ってはいなくて

② 内裏より御使ひ、雨の脚よりもけにしげし。(源氏)
宮中からお使いは、雨脚より 雨脚より

頻繁である(②)の意味でも用いられるようになった。

「しげし」は数量や度数が多いこと

「茂し」または「繁し」と漢字をあて、量や数の多いことを表現する形容詞。すき間もないほどにびっしりと詰まっている様子を言う。また、物の回数が多いということから、〈度数が多く、

282

ふるさと

(古里・故郷)

① 旧都・むかし都のあった所
 ② なじみの土地
 ③ 実家・自宅

① ふるさととなりにし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり(古今)
旧都となっていました 奈良の都にも、色が変わることなく桜の花が咲いているなあ。

② 人はいさ心も知らずふるさは 花ぞ昔の香に匂ひける(古今)
人はさあ、心の中はわからないが (心)なじみの土地では 梅の花が昔通りの香りに匂って咲いているよ。

③ おのおの、ふるさとに心細けなる言伝すべかめり。(源氏)
それぞれ 自宅に 心細いことな 便りを伝えるようにめ。

過去の体験とつながる土地
 現代語ではもっぱら「生まれた土地・故郷」の意味で使われるが、古語の「ふるさと」はもっと幅広い意味をもち、「何らかの形で、過去の出来事や体験とつながる土地」を指した。平安時代の人たちにとっては「奈良の都」といった旧都がそれにあたり、個人にとっては「以前住んでいたところ」が、また、旅先や宮仕え先に対しては「自宅」がそれに該当したのである。

読み得 コラム

◆「こんな「ふるさと」も頻出◆『堤中納言物語』の一節である。大納言家に、容貌・性格ともにすばらしい姫君がいた。大切に育てられてきたが、大納言と母上が続いて亡くなった。しっかりと世話係の女房もいない。そんな時の描写はこうである。

年に添へて人目まれにのみなりゆくふるさに、いと心細くておはせしに、(一年が経つにつれて人の姿も少

なくなっていく「ふるさと」に、たいそう心細い状態で住んでいらしたことが、

この「ふるさと」は「幼い頃から住む家」の意。ちなみに物語では、このような姫君のところに男が通つというストーリーが多い。この物語でも、若い女房の手引きにより、男が通い始める。ただ、しばらくすると男の足が遠のき、姫君の物思いが重なるようになる。これもお決まりの筋立てである。